

白藍塾オリジナル

2020入試小論文分析&解答のヒント

2020年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

● 早稲田・スポーツ科学部

今年度の課題も、ここ数年同様、課題文などのないテーマ題となっている。ただし、今年度は、「科学とは疑うことである。」という書き出しで、文章を書くことが求められているだけだ。これには、さすがにほとんどの受験生がとまどうだろう。

ただし、この書き方を最初に結論を示すパターンと捉えれば、むしろ4部構成を応用して書きやすい。つまり、「科学とは疑うことである」という文を第1部とし、それに続けて、「確かに、科学は疑いのような事実をもとに考える。しかし、科学の本質は、むしろつねに疑い続けることにあるのだ」などのように第2部をまとめる。その上で、第3部で、「科学とは疑うことだ」ということ具体的な内容を書けばよいわけだ。

その際、これがスポーツ科学部の入試であることを考え、スポーツ科学のあり方や理念などを踏まえて論じるのがやはり正攻法だろう。すぐに思いつくのは、スポーツ科学というのは、従来のスポーツの世界での常識を疑うことから始まることが多いということだ。たとえば、かつては学校の部活動でも、「水を飲むな」と言われたり、うさぎ跳びが奨励されたりしていた。これらは、現在ではどちらもむしろ子どもの体に悪影響を与えるとして否定されている。また、近年問題になっている、高校野球などの投手の投げ込み禁止についても、同じことだろう。

このように、スポーツ科学というのは、単なる経験や勘が幅を利かせてきたスポーツの世界において、そうした常識や通念を疑うことで、スポーツを科学的に考えることを可能にしてきたわけだ。そうしたことを書けば、十分説得力のある内容になる。

以上のように、4部構成の応用のしやすさ、またスポーツ科学の理念との結びつけやすさに気づきさえすれば、今年度の課題はむしろ書きやすいはずだ。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://www.hakuranjuku.co.jp>